

2022年4月3日

四旬節第五主日

菊地功大司教 メッセージ

イザヤの預言は、出エジプトの出来事を追憶しながら、「見よ、新しいことを私は行う」という主の言葉を記し、過去の常識に捕らわれずに神の新しい働きに身を委ねよと呼びかけます。

パウロもフィリピの教会への手紙で、「キリストのゆえに、私はすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています」と記して、過去に捕らえられることなく、キリストに身を委ねて前進を続けるようにと励ましを与えています。

ヨハネ福音は、これもよく知られた「姦通の現場で捉えられた女」の話です。時代と文化の制約があるとはいえ、共犯者であるはずの男性は罪を追及されることがなく、女性だけが人々の前に連れ出され断罪されようとしています。イエスはそのいつくしみの心を持って、罪を水に流して忘れてしまうのではなく、一人責めを受けいのちの尊厳を蹂躪されようとしている人を目前にして、その尊厳を取り戻そうとされます。「あなたたちの中で罪を犯したことの無いものが、まず、この女に石を投げなさい」

2016年の「いつくしみの特別聖年」閉幕にあたって、教皇フランシスコは使徒的書簡「あわれみあるかたと、あわれな女」を発表され、その中でこの物語を取り上げてこう記しています。

「(イエスの行いの) 中心にあるのは、法律や法的正義ではなく、それぞれの人の心の中を読み取り、その奥に隠された願望を把握することのできる神の愛です。・・・ゆるしは、御父の愛のもっとも目に見えるしるしです。それをイエスは、その全生涯を懸けて現そうとしました。(同書簡1)」

その上で教皇様は、「ゆるしの喜びは口で言い表し尽くすことはできませんが、ゆるしを体験するつど、わたしたちは周囲にそれを輝かします。その源には愛があり、それとと

もに神がわたしたちにまみえようとなさいます。わたしたちを取り囲む自己中心主義の壁を突き破りながら、今度はわたしたちを、いつくしみの道具となさせます」と記しています。

罪を犯したと断罪のために連れてこられた女性に対するイエスの言葉と行いは、断罪による共同体の絆からの排除ではなく、御父との絆を回復するための回心への招きでした。御父に向かってあらためて歩むようにとの招きです。過去に捕らえられることなく、新たにされて、キリストに身を委ね、前進を続けるようにとの励ましです。

教会のゆるしの秘跡の緒言は、「ミサの奉獻の中においてはキリストの受難が再現され、わたしたちのために渡されたからだ、罪のゆるしのために流された血が、全世界の救いのために再び教会によってささげられる」と指摘し、聖体のうちに現存されるキリストを通じて、それに与るわたしたちは聖霊によって「一つに結ばれる」と記しています。

その上で、キリストご自身が弟子たちに罪をゆるす権能を授けたことを記し、「教会は水と涙、すなわち洗礼の水と回心の涙を持っている」ものとして、教会がその存在を通じて神の愛しみに満ちあふれるものであらうとする事実を伝えます。

具体的にいつくしみを表す行動を呼びかける教皇様は、「ひとたびいつくしみの本当の姿に触れたならば、後戻りすることはありません。・・・それは新しい心、せいいっぱい愛すること、より隠れた必要をも見分けるよう目を清めてくれる、本物の新たな創造です」と励ましておられます。(同上書簡 16)。主はいつくしみで常にわたしたちを包み込み、過ちを徹底的にゆるし、いのちの尊厳を回復してください。わたしたちはいつくしみの業に励み、世界に希望を生み出しましょう。